

動く海底

青空文庫で、海中や潜水夫（当時を勘案して潜水夫と記した）の状況を描いた作品を見つけました。職業的にも趣味的にもダイビングに親しんできた自分にとって、興味深くとも示唆に富まされる作品です。

以下の標題をクリックすると、青空文庫のページに飛びますので、ぜひともお読みになってください。

動く海底 宮原晃一郎

海水浴 寺田寅彦

ひらめの学校 林芙美子

1800年代後半から昭和初期まで、多くの日本人が、オーストラリア北部のアラフラ海で高級ボタンの原料となる白蝶貝の採取のため渡航した潜水夫を描いた児童文学です。

主人公は大海今太郎君という十五才の少年が潜水修行を通じて、海中でさまざまな経験しながら潜水技術はもちろんな人生の成長を描いた冒険物語と思うのです。



物語は浦島太郎の話に似て、ウミガメを捕えた同じ船に乗る水夫たちが酒の肴するとうい。ウミガメを可哀そうに思った今太郎君は父や仲間に頼んで逃がしてやりまし

た。

十六才になった今太郎君は海に潜りました。その海中風景は、海藻の群落・砂地、崖のような岩場、そこを通り過ぎる魚群、そうぼくがよく見る海中景観と同じです。

さらに美しい珊瑚や蛸が食べた蟹の残骸は海の生態を実に表しています。

そして、蛸と海豚の格闘は、少年の時期を遠の昔に置き忘れた自分の心も踊りました。

庄巻は鱻（鮫のこと）に襲われたシーンです。そのときの今太郎君の状況は、忘れようもないことがぼくにあります。南極氷海で豹海豚が迫ってきたとき、岩場を背にしてフラッシュガンを焚き、顔面近くで迫り助かったのです。実に今太郎君の心境が解ります。

最後に今太郎君が乗っていた岩が大海亀の甲羅で、その甲羅に乗って無事戻ることができました。

浦島太郎は乙姫様から玉手箱を貰いましたが、今太郎君は命をもらいました。それから今太郎君は木曜島での名潜水夫として活躍したというお話です。

海水浴

潜水病悲話であろう。

明治時代初期（1872年前後）から始まった日本の潜水―送気式・ヘルメット潜水―。昭和36年に水中労働者の保護―潜水病予防―のために、労働省が「高気圧障害防止規則―昭和52年に高気圧作業安全衛生規則に改称―」を定めた。この間89年、ずいぶん長い時間を要したものだ。

国内外で活躍するダイバーには悲劇に見舞われた者が多かった。アラフラ海の木曜島では700人以上ものダイバーが命を落とし、今でも多くの墓標が残っているという。死亡の大半は今では減圧症という潜水病である。減圧症は英国の化学者ウイリアム・ヘンリーが発表した「ヘンリーの法則」に起因する。減圧症のメカニズムはすでに自明となつているので割愛する。

ヘンリーが法則を発表したのは1803年、機械潜水の歴史からみれば新しく―送気式ヘルメット潜水器は1700年代に作られている―。

潜水病のメカニズムを全く解らないうで行われていた暗黒

の時期が世界的にあつたに違いない。翻れば暗黒の時代にあつたダイバーたちが、現在の潜水医学の学問的知見を發展させる礎になつたと言つてもいい。

テレビが白黒の時代にドキュメンタリーで、和歌山県の潜水夫が潜水病に罹り重篤の症状で苦しんでいるのをうつすらとした記憶にある——アラフラ海に渡つたダイバーは和歌山県の人がいちばん多かつた——。

昭和36年に高気圧障害防止規則が施行された社会情勢にちなんで制作されたのではないかと思う。これ以前、昭和10年『文芸春秋』に掲載された寺田寅彦の随筆「海水浴」に次のような一文がある(以下抜粋)。

「大正の初年頃外房州の海岸へ家族づれで海水浴に出かけたら七月中雨ばかり降つて海にはいるような日がほとんどなく、子供の一人が腸を悪くして熱を出したりした。宿の主人は潜水業者であつたが、ある日潜水から上がると身体中が痺しびれて動けなくなつたので、それを治すためにもう一遍潜水服を着せて海へ沈めたりしたが、とうとうそれつきりになつてしまつた。自分等は離屋にいたのでその騒ぎを翌日まで知らなかつた。その二、三日前の夜にその主人が話しに来たとき自分も二十余年前の父の真似をし

て有り合せのベルモットか何かを飲ませたら、この男もやはりこんな酒は始めてだと云つて喜んで飲んだ。多分たつた一杯飲んだだけであつたが、しかしその馴れない酒を飲んだという事と、間もなく潜水者病に罹つたこととの間に何かしら科学的に説明出来るような関係があつたのではないかというような気がして、妙に不安な暗い影のようなものが頭につきまとして困つた。」

この文から、大正の初めには減圧症が何に起因しているか、分かつていたのか、解つていなかったのか、真意は定かでないが、経験的に「フカシ」という行為を連想させる記述がある。寺田寅彦はこの体験を14年後に発表した。彼はこの間、減圧症について、何がしらかの科学的な裏づけを持つたに違いない。顧みればこの時期、潜水における物理学や化学と医学や生理学の関連性を探求する過渡期でもあり發展期でもあつたことを物語っている。

他にもアラフラ海では、海が暖かいのでゴツイ潜水服を嫌つてヘルメットだけを被つて作業をする者もいて、水中作業を終えると水中でヘルメットを脱ぎ捨てて浮上する。そのとき本能的に息を止めて浮上する者もいてその結果、海面に到達するやいなや、ちようど深海の魚を釣り上げた

とき浮き袋を口から吐き出している同じ物理現象で、肺内の空気が過剰に膨張して肺を壊す。口から血を吐いて死亡したり、後に後遺症に悩ませられたりした(エアエンボリズムという)。これも潜水における物理作用の無知から起こったことでもあった。今では減圧症同様原因も明らかになり、タンクからの空気が断たれた場合は、息を吐きながら浮上するといった方法がダイバーの常識となつている。どんな方式の潜水でも、自然の法則は万人に分け隔てなく作用する。教訓である。

注―体内で発生した気泡を消すために再び潜り、その

気泡が発生しないようにゆっくり浮上すること

注―グアム島などで見られる観光用の水中ウォーキング

潜水器のような利用の仕方

注―ボイルの法則

参考―木曜島のダイバーの様子については

司馬遼太郎『木曜島の夜会』をお勧めする。

ひらめの学校

としえにうつくしき海の国
あらそいをさけ手をつなぎ
海の神に祈る海のはらから
われらたのしくまなび
われらたのしくはたらく海の国

この詩は、小説『放浪記』の著者林芙美子(1903年(明治36年)―1951年(昭和26年)の短編『ひらめの学校』の一節で、静謐なる海中の景色と生き物の営みが走馬灯のように脳裏を巡り海の旅情に誘われる。奇しくも同じ生年の童謡詩人金子みすず(1903年(明治36年)―1930年(昭和5年)と共通する自然への思慕の情が伝わってくる。

ところでこの『ひらめの学校』を読んだとき、芙美子は海女やダイバーのように実際に海の中を見たのだろうか。

彼女が存命の頃には、今のよう一般の人々が海に潜るといふカルチャーは多分なかったから、彼女には実際に潜水することはなかっただろうが、いや水中めがねで海の中を覗いたかも知れない。

彼女の古里は尾道である。自身が海辺に立ち、ヘルメット潜水者や釣り人から海中の話聞くことができただろう。これら見聞きによつて海中を想ったのか、はたまた生まれ持った海への憧憬というものからか、この短編を創作したのだろう。『ひらめの学校』はおとぎ話だが、叙情溢れる詩なのである。

芙美子は、軍靴の音がしのび寄る開戦の頃から敗戦そして混乱の戦後と、戦争に翻弄された時代に生きた。その混沌とした世相にあつて、子どもたちの健全な成長を願ひ、絆の大切さを海の生き物に投影して平和を訴えたのであろう。この短編は、彼女の心の海からの伝言なのだろう。

そして何よりも「海中的なるもの」が、全編にわたりととうとうと流れている。一介のダイバーの自分も揺さぶられる。

道すがら一向がブリの群れに遭遇すると、引率の先生が笛を吹いて生徒たちを岩に張りつかせる。このくだりは、アフリカのタンガニカ湖のカワズズメのP・ミクロレオイレスがとるほほえましい行動にそっくりだ。ひらめは実際にはこの行動はしないが、時空を超えた芙美子の想像力に感嘆する。

おわりに

『動く海底』の初出は1932年（昭和7）『海水浴』は1935年（昭和10年）の初出である。ぼくが生まれるよりも遙か昔に書かれた。今は亡き潜水の長老に日本人潜水夫（ダイバー）は世界でも優秀だと聞いたことがある。

それを裏付けるのが、1847年（安政4年）に長崎港のドック建設に潜水技術が導入され、その後慶応2年（1866年）に増田万吉によるイギリス船ハラシイ号の船底修理、大正13年（1924年）に片岡弓八による水深70mの八坂丸からの金塊引き上げは顕著な例で、アワビ・サザエなどの採捕に利用された。最近と言えないけど1994年に開港した関西空港の建設おける海底石積みへヘルメット潜水士が活躍した。

以上のような機械潜水は歴史的には浅く、日本には古来より続く海女の素潜り漁がある。素潜り漁は福岡県鐘崎が発祥とされ、この地区の素潜り漁は『魏志倭人伝』に記述されている。

また、世界には400ほどの水族館があると言われるが、そのうち日本には150もの水族館がありほぼ4割をしめる。この水族館の多さに驚く。

今ダイビングを愛好するものが100万人を超えと言
う。これも潜水の経緯からも、四面海に囲まれた列島に
住む日本人のどこかに「海への憧憬とか思慕の念」というも
のが知らず知らずのうちに醸成されてきたと思うのである。